

中世における存在を表す「ものしたまふ」
—「おはす・おはします」「わたらせたまふ」と比較して—
"Monoshitamawu" representing the existence in the Middle Ages:
Compared with "owasu / owashimasu" and "watarasetamawu"

余 飛洋

YU FEIYANG

摘要

The ancient Japanese word "*monosu*" is a pro-verb that expresses various actions centered on movement and existence. Among them, the types that are mainly represented by honorific forms such as "*monoshitamawu*" have decreased in number since the Muromachi Period and have almost declined since the Edo Period. Regarding the cause, in the previous theory, it is assumed that "*monoshitamawu*" was replaced by "*watarasetamawu*", which is often used in War chronicles. Moreover, it is also considered that in the Kamakura Period, "*owasu / owashimasu*", which has indicated the existence since the Heian Period, was often used. Therefore, this article aims to investigate the usage of these "*monoshitamawu*", "*owasu / owashimasu*", and "*watarasetamawu*" as expressions of existence. The result shows that "*owasu / owashimasu*" is used in a wide range of existence sentences including the first introductory sentence, while "*monoshitamawu*" and "*watarasetamawu*" are showing similar tendencies in usage distribution. However, it also shows that about 60% of "*monoshitamawu*" is seen in quantitative existence sentences, and about 80% of "*watarasetamawu*" is seen in spatial existence sentences. That is, the two expressions vary in the density of specific usage. We can suggest that these differences are due to the semantic nature of the individual verbs. Regarding the distribution of examples by style, "*monoshitamawu*" is neither found in War chronicles, nor in Muromachi-period texts and Christian materials, indicating a bias toward Medieval courtly fiction. In comparison, "*watarasetamawu*" is prominent in War chronicles. In other words, "*monoshitamawu*" being "replaces" by "*watarasetamawu*" can be considered as a historical development peculiar to War chronicles. Besides, the change in the meaning and usage of "*monoshitamawu*" is inseparable from its character as a pro-verb. There is still room to discuss the decrease of "*monoshitamawu*" in the usage of existence from other viewpoints. For instance, we can observe through the honorific form namely "*monoshitamawu*". We can also try to find out the link between it and the decline of the usage as a subsidiary verb.

キーワード：存在文 ものしたまふ おはす おはします わたらせたまふ

Keywords: existential sentences *monoshitamawu* *owasu* *owashimasu* *watarasetamawu*

1. はじめに

古代日本語の「ものす」は、代動詞として様々な動作を表す。そのうち、主に(1)のような「ものしたまふ」等の敬語形で存在を表す用例は、中世後期から減少し近世期以降ほとんど見られなくなる。その減少の原因について、考察する論考は多くないが、中村(2001)、高橋(2010)は、軍記物語で多用される「わたらせたまふ」に注目する。「わたる」は本来、移動動詞であるが、中世には「わたらせたまふ」等の敬語形で、存在を表していた。高橋(2010)は、(2)のような「わたらせたまふ」が、「ものしたまふ」の用法を引き継いでいるという。一方、中世期の文献には、中古期以来存在を表す「おはす・おはします」も多用されている((3)(4))。

- (1) 女宮の御腹には、男にて二人なんものし給ひける。 (石清水物語：10)
 (2) 御心地悩ましげにて、上はつと渡らせ給ひて、 (むぐら：176)
 (3) これも今は昔、京極の源大納言雅俊といふ人おはしけり。 (宇治拾遺物語：44)
 (4) この御腹に、春宮・一品の宮おはします。 (海人の刈藻：14)

(1)の「ものしたまふ」は男君二人の存在を表している。(2)の「わたらせたまふ」は帝が女君の傍に存在していることを表す。(3)は、物語の冒頭文で、「おはす」は源大納言雅俊の存在を表す。(4)の「おはします」は中宮の子として、春宮と一品の宮が存在することを表す。

(1)～(4)の「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」は、それぞれ存在の意を表す。しかし、その存在を表す用法は同じだろうか。本稿は、国立国語研究所『日本語歴史コーパス』、『新編日本古典文学全集』、『中世王朝物語全集』などを用い、中世における存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」を調査し、それぞれの存在を表す用法の特徴と相違点を明らかにする。これにより、「ものしたまふ」の衰退の原因について示唆を得ることを目的とする。

2. 先行研究

存在を表す「ものしたまふ」と「わたらせたまふ」について、先行研究としては中村(2001)と高橋(2010)が挙げられる。

2. 1. 中村(2001)「存在詞「わたらせたまふ」と、その周辺」

中村(2001)は、「ものす」が「あり」の意を担う場合は、ほとんど「ものしたまふ」の形に限られ、また、「あり」の意の「わたる」についても、すべてが「わたらせたまふ」という形であるといつてよいという(中村 2001：23)。さらに、中古における「わたる」は、専ら「わたりたまふ」や「わたらせたまふ」などの形で、貴族の移動を表すと指摘した上で、「わたらせたまふ」が、中世に至って存在を表すようになり、『保元物語』『平治物語』『平家物語』の中で圧倒的に「あり」の尊敬表現として用いられている実態について解説している(中村 2001：24)。

2. 2. 高橋(2010)「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせたまふ」

高橋(2010)は「中世王朝物語」を中心に、存在を表す「ものしたまふ」と「わたらせたまふ」について考察した論考である。中古において用いられた「ものす」は、中世にいたると、あまり使用されなくなり、特に、軍記物語ではその用例を確認できないという(高橋 2010 : 334)。「ものしたまふ」は、中古の仮名物語で頻用されたが、時代を中世に移すと、「中世王朝物語」である程度のまとまった使用が確認できるものの、その勢力は衰えているとする。これは「ものしたまふ」の衰退でもあるが、軍記物語が出自かと思われる存在詞「わたらせたまふ」が「ものしたまふ」に代わって使用され始めたことによる(高橋 2010 : 341)。

2. 3. 問題点

中村(2001)、高橋(2010)はともに、中世において存在を表す「ものす」が減少したことを指摘する。さらに高橋(2010)は、その減少に関して、存在を表す「わたる」の使用が一要因であると考えている。これら2つの先行論がその根拠として挙げるのは、まず形の面から見た共通点である。「ものす」が「あり」の意を担うのは、ほとんどが「ものしたまふ」という二語連用の形に限られ、「わたる」が「あり」の意を表すのもほとんど「わたらせたまふ」という三語連用の場合であるという。つまり、「ものす」「わたる」はともに「～たまふ」という敬語形で存在を表すという点で共通している。中村(2001)・高橋(2010)はともに、この点に着目して「ものしたまふ」「わたらせたまふ」を「存在詞」と位置づける立場を取っている。また、高橋(2010)によれば、存在を表す「ものす」は中世期から減少しつつ、軍記物語には用例がない。一方、存在を表す「わたる」は中世期から現れ、ほとんど軍記物語の中で使われているという。この軍記物語の様相が「存在詞」において「わたらせたまふ」が「ものしたまふ」に交替したとみる大きな根拠となっている。

しかし、「ものしたまふ」「わたらせたまふ」を「存在詞」と位置づけるのは適当であろうか。筆者の観察では、「ものしたまふ」「わたらせたまふ」は「存在」だけではなく、「移動」を表す用例も多い。例えば中古における「ものしたまふ」の用例は、508例のうち、補助動詞用法が281例、本動詞用法のうち、「存在」を表すものが143例⁽¹⁾、「移動」を表すものが46例、その他の動作(「食べる」「言う」など)を表すものが38例ある。これに対し、中村(2001)・高橋(2010)では、「ものす」「わたる」の観察において、補助動詞用法・本動詞用法の双方とも「存在」の範疇に収めている。つまり、「伊衡の宰相、中將にものしたまひける時」(大和物語 : 412)のような補助動詞用法としての「ものす」も「あり」相当であり、「存在」を表すものとして考察されている。このような「ものしたまふ」と「わたらせたまふ」が「あり」相当であること、また「あり」の尊敬語であることについては異存がないが、「存在詞」としてその用法を継承したとみることには疑問も感じる。まずこの点について、判断を留保し、本稿では本動詞用法

に限定して用例を精査したい。

また、ジャンル・文体別の状況に関しては、軍記物語での様相が鍵となっているが、その他のジャンルの状況は必ずしも明らかでない。軍記物語の「わたらせたまふ」が「ものしたまふ」の用法を受け継いでいるのか否かについては、より幅広いジャンルでの検討も必要であろう。

2. 4. 用法の分類基準

① 存在か移動かその他か

本動詞用法に限って観察をする上で、まず用法の分類基準を示す。本稿においては、「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」が「存在」を表すか、「移動」を表すか、その他の動作を表すかが重要である。まず、基本的には文脈から判断する。文脈の中で存在の場所が明らかであり、かつ主体に移動の動作が認められない場合は「存在」と判断する。また、移動や存在に関わる場所名詞句の格標示の様相から判断する。中古和文において移動が行われる場所の格標示について調査した松本(2020)によれば、移動が行われる場所は経路と移動領域に分類でき、「経路の格標示は主に「を」が、移動領域の格標示は主に「に」が担っていた」(松本 2020 : 17)と述べる。よって、場所名詞句が「を」格標示されている場合は「移動」と判定できる。「移動の完了後に、移動が行われる場所とは別の場所へ移動したことが明示、含意されている場合」を、移動が行われた場所の「経路」とし、「別の場所への移動が明示、含意されない移動の場合」を、移動が行われた場所の「移動領域」とする(松本 2020 : 20)。「に」格は存在の場所も、移動の着点や方向も表すが、この判断基準に合致する場合は、「に」格標示の場合も「移動」とする。なお、松本(2020)によると、「中世には、「に」が担っていた移動領域の格標示を次第に「を」が担うようにな」ったという(松本 2020 : 17)。「わたる」の用例でも、「中世王朝物語」では「に」格で移動の着点や方向、移動領域を表す用例が少なくないが、「軍記物語」では「に」格を伴って移動を表すものは少なく、「へ」「を」格が「わたる」と共起して移動を表す用例が多く見られる。

② 存在文の下位分類

観察において本稿が特に注目するのは、存在文としての使い分けである。例えば、先の(1)は人と人の所属関係を表す「存在」であり、(2)は人がある場所にいるという「存在」である。同じ「存在」を表しても、それぞれの内実は異なっている可能性がある。存在文に対して下位分類を設定し、その歴史的変化を考察した金水(2006)によると、同じ存在の意を表しても、「厳密に「いる」しか用いられない種類の存在文と、有生の主語を取っていても「ある」が許容される種類の存在文がある。」(金水 2006 : 13)という。

金水(2006)は、(1)のような存在文を「限量的存在文」、(2)のような存在文を「空間的存在文」と呼ぶ。さらに、「空間的存在文」は、「所在文」、「生死文」、「実在文」、「眼前描写文」に分けられ、「限量的存在文」は、「部分集合文」、「初出導入文」、「所有文」「リスト存在文」に分

けられ、それぞれ使い分けがあるという。端的に違いをまとめると以下のようなものである。

空間的存在文のうち、「所在文」は、(5)のような、物理的な空間、あるいは時間を対象として占有することを表すものである。「生死文」は、(6)のような、有生の対象物の生死を表す存在表現であり、「この世に」「あの世に」等の場所表現が含意あるいは明示されたものである。

「実在文」は、「生死文」に類似した表現で、存在対象は、現実世界での存在ではなく、「神様／宇宙人／幽霊」などの存在を表すものである。例えば、(7)はその一例である。「眼前描写文」は、(8)のような、眼前の状況を描写するものである。

- (5) 「父の渡らせたまふ所へ疾う疾う参れ、といふにてこそあれ。(略)」と教へければ、
(石清水物語・163)
- (6) この御行方を知り侍らんと思ひ給へれど、世におはしまさば、さりともつひに聞き奉るやうも候ひなまし、
(浅茅が露：274)
- (7) 仏神は世におはしけるものと、喜びあへり。
(あきぎり/上：38)
- (8) こなた近き御簾押し張りて、殿はおはする。
(いはでしのぶ：301)

一方、限量的存在文のうち、「部分集合文」は、(9)のような、主として連体修飾節を用いて部分集合を言語的に設定し、その集合の要素の有無多少について述べるものである。「初出導入文」は、(10)のような、物語の展開上、登場人物を導入するために特に動機づけられた限量的存在文の一種である。「所有文」は、(11)のような、所有者と所有対象の関係を表す数の有無多少を述べる文である。「リスト存在文」は、(12)のような、存在対象を数え挙げていく表現で、集合の要素の有無多少を述べる所有文と近い関係にある。

- (9) 「何事もみな口惜しく、あせゆく世の末なれど、かかる人のものし給ひけるよ」と驚かれて、
(とりかへばや：68)
- (10) これも今は昔、中納言師時といふ人おはしけり。
(宇治拾遺物語：35)
- (11) その頃、東宮よりほかには若君などもものし給はで、
(夜寝覚物語：348)
- (12) この君たちもとりどりにあたらしけれど、内裏には中宮、故中宮などおはしまししに、思し寄るべきならず。
(風につれなき：182)

本稿は金水(2006)における存在文の分類を参照し、本動詞用法として「存在」を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の用例を採集しそれぞれの存在を表す用法の内実を明らかにする。

3. 存在を表す「ものしたまふ」

中世における「ものす」の用例 516 例のうち、存在の意を表す用例は 150 例がある(対して、移動の意を表すもの 68 例、その他の意を表すもの 73 例、補助動詞としてのもの 225 例)。そ

の特徴の一つは、96.7%の用例が敬語形で用いられることである。「ものしたまふ」という形としての用例は129例、「ものせさせたまふ」は5例、「ものせらる」は10例、「ものしはべり」は1例、単独の「ものす」が存在の意を表す用例は僅か5例である⁽²⁾。

表1 中世における存在を表す「ものしたまふ」の用例分布

種類		用例数と割合	計 150
空間的存在文	所在文	61(40.7%)	64(42.7%)
	生死文	3(2%)	
	実在文		
	眼前描写文		
限量的存在文	部分集合文	16(10.7%)	86(57.3%)
	初出導入文		
	所有文	70(46.7%)	
	リスト存在文		

表1を見ると、最も多いのは「限量的存在文」の「所有文」46.7%であり、ついで「空間的存在文」の「所在文」40.7%である。この2類で87.4%と大半を占める。また、「空間的存在文」では「実在文」「眼前描写文」、「限量的存在文」では「初出導入文」「リスト存在文」の用例が見出されなかった⁽³⁾。

3. 1. 「空間的存在文」

「空間的存在文」のうち、「所在文」は61例あり、「生死文」は3例にとどまる。いずれも場所名詞句が伴うか、あるいは場所が想定できる。(13)は、存在の対象が、提示された場所名詞「ここ」という物理的空間を占有することを表す「所在文」である。(14)は、場所名詞句「この世に」が明示され、有生の対象物の生死を表す「生死文」である。

(13) 「雪見にまかり歩きつるついでに、ここにものせさせ給ふと承りて来つる」と言はせ給へれば、(海人の刈藻：20)

(14) まいて、かの母院の御山をさして参り給ひつつ、(略)「さすが、この世にものし給はんを見捨てては、(略)」と思ふは、(いはでしのぶ：342)

3. 2. 「限量的存在文」

「限量的存在文」に当たる「ものしたまふ」の用例は86例あり、「所有文」にあたる用例は70例である。「部分集合文」である用例は16例ある。(15)の「ものしたまふ」は、承香殿が「女宮二所」を子供として所有する意を表す。(16)は、連体修飾節「さること知るべき人」という部分集合が設定され、その集合の要素について有無多少を述べている。

- (15) またそのころ、承香殿と聞こゆるは、故式部卿の女御ぞかし。御おぼえも重き方浅からぬが、女宮二所ものし給ふ。(風に紅葉/上：25)
- (16) (中将)「北の方の聞き思さんこともいかが。つつましよう。今までさること知るべき人もものせられぬを」と思す。(しら露：233)

4. 存在を表す「おはす・おはします」

次に、「おはす・おはします」の様相を確認する。分類は三節と同じ方法で行う。

表2 中世における存在を表す「おはす・おはします」の用例分布

種類		用例数と割合		計 1456	
		おはす	おはします		
空間的存在文	所在文	354	454	808 (55.5%)	1024 (70.3%)
	生死文	132	60	192 (13.2%)	
	実在文	2	5	7 (0.5%)	
	眼前描写文	5	12	17 (1.1%)	
限量的存在文	部分集合文	14	10	24 (1.6%)	432 (29.7%)
	初出導入文	20	7	27 (1.9%)	
	所有文	218	156	374 (25.7%)	
	リスト存在文	3	4	7 (0.5%)	

表2に存在を表す「おはす・おはします」の種類と用例数を示す。中世における存在を表す「おはす」は748例、「おはします」は708例採取した。「おはす・おはします」は全ての存在文の種類が含まれている。また、「空間的存在文」の割合が70.3%と多く、「限量的存在文」は29.7%に止まる。

4. 1. 「空間的存在文」

「空間的存在文」のうち、「所在文」は808例、「生死文」は192例、「実在文」は7例、「眼前描写文」は17例ある。(17)は、「所」と「三条高倉」という場所名詞句が提示され、「所在文」である。(18)は、場所名詞句は明示されていないが、「この世に」と想定でき、「生死文」である。(19)は「実在文」であり、(20)は、「眼前描写文」である。

- (17) 先坊のおはします所は三条高倉なれば、這ひわたるほどなり。(浅茅が露：182)
- (18) 中宮は、心づきなく思し召さるれど、母のおはせばこそはめざましからめ、
(雲ににごる：21)
- (19) 「神・仏のおはしまさば、(略)」など、(小夜衣：136)
- (20) 幼心地にも、女御の御さまの日ごろ人にすぐれてうつくしうなつかしと見きこえつる

宮よりも、なほ目もあやなるを、つくづくとまもりきこえ給ふを、(略) (大将)「あなたにおはすと、いづれかまさりて見奉る」とのたまへば、 (風に紅葉：43)

4. 2. 「限量的存在文」

「限量的存在文」には、「部分集合文」が 24 例、「初出導入文」が 27 例、「所有文」が 374 例、「リスト存在文」が 7 例見られた。(21)は、「失ひ給ひける女御」という連体修飾節が設定され、「部分集合文」である。(22)は、物語の冒頭文で導入するための「初出導入文」である。(23)の「おはす」は、「御子二人」が存在するという意を表し、「所有文」である。(24) ((4)の再掲)は、複数の所有物を列挙する「リスト存在文」である。「リスト存在文」に当たる「おはします」の用例は、全て(24)のような、親族関係を列挙するものである。

- (21) 三千人の妃も、武士どもを語らひて失ひ給ひける女御もおはしますや、かかるためしも世になき事ならず、 (小夜衣：184)
- (22) これも今は昔、法輪院大僧正覚猷といふ人おはしけり。 (宇治拾遺物語：112)
- (23) 「娘やおはする」と宣へば、「しか侍り。御子二人おはするが、男は国にとまりて、姫君はこれになん」と、 (石清水物語：29)
- (24) この御腹に、春宮・一品の宮おはします。 (海人の刈藻：14)

5. 存在を表す「わたらせたまふ」

最後に「わたらせたまふ」の様相を観察する。中世における「わたらせたまふ」の用例は 1600 近くの用例を採取したが⁽⁴⁾、存在を表す「わたらせたまふ」の用例は僅か 92 例であった。中世期の「わたらせたまふ」には確かに存在の意を表す用例が認められるが、移動の意を表す用例がほとんどであるという点で、まず「ものしたまふ」とも「おはす・おはします」とも異なる。

表 3 中世における存在を表す「わたらせたまふ」の用例分布

種類		用例数と割合	計 92
空間的存在文	所在文	66 (71.8%)	73 (79.3%)
	生死文	5 (5.4%)	
	実在文		
	眼前描写文	2 (2.2%)	
限量的存在文	部分集合文	3 (3.3%)	19 (20.7%)
	初出導入文		
	所有文	16 (17.4%)	
	リスト存在文		

表3は存在を表す「わたらせたまふ」の種類と用例数を示すものである。存在を表す用例のうち、80%近くの用例は「空間的存在文」で、「実在文」「初出導入文」「リスト存在文」の用例は見当たらない。また、確かに中村(2001)が指摘している通り、存在の意として使われている用例では、ほぼ「わたらせたまふ」の形である。その他、「わたり候」「わたらせおはします」などの形も見られる。「わたる」単独で存在を表す用例は見当たらない。

5. 1. 「空間的存在文」

「空間的存在文」としての「わたらせたまふ」には、「所在文」が66例、「生死文」が5例、「眼前描写文」が2例見られる。(25)は、場所名詞句「按察の二品のもと」が提示され、「所在文」である。(26)の「わたらせたまふ」は、目の前の人物の空間的存在を表す「眼前描写文」である。

(25) 按察の二品のもとにわたらせたまふ今御所とかや申す姫君、 (とはずがたり：318)

(26) 館の内に、我が妹のわたらせ給へるを、いと心得ずながら、人々をして、我が御庵へ入れ給ひぬ。 (松陰中納言：115)

(25)の所在文、(26)の眼前描写文のどちらも空間存在文の「わたる」は「に」格名詞句によって存在場所が明示されている。軍記物語の「所在文」では、「法皇のわたらせ給ふ五条内裏に参って」(平家物語/巻八：152)のように「主体の+「わたらせたまふ」+場所」という構文が見られるようになる。これは「王朝物語」には見られない構文である。

5. 2. 「限量的存在文」

「限量的存在文」には、「部分集合文」が3例、「所有文」が16例ある。(27)の「つつが」は、「病」のことで、「天皇にはご病気もおありにならない」の意である。「所有文」である。

(27) 二月廿一日、主上ことなる御つつがもわたらせ給はぬを、 (平家物語/巻四：265)

6. 考察

表1～表3から分かるように、「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」はいずれも同じく存在の意味を表すが、その用法には大きな違いが見える。

6. 1. 存在文の種類の違い

「おはす・おはします」は、存在文の下位類を網羅している。それに対して、「ものしたまふ」「わたらせたまふ」はともに「リスト存在文」、「実在文」「初出導入文」の用例が見られず、「ものしたまふ」は「眼前描写文」の用例も見られない。また、「わたらせたまふ」は8割が空間的存在文に偏ること、「ものしたまふ」の場合は、「所在文」と「所有文」で大半を占めること、とりわけ「所有文」の割合が最も高く、結果として限量的存在文の占める割合が6割に

達する点が特徴的である。

6. 2. 存在文における存在対象の違い

「所有文」に相当する「ものしたまふ」の用例は、70例のうち、45例は(4)のような、「人」の所有、親族関係の所有を表すものである((1)(11)(15)など)。残りの25例は(28)のような、物事の所有、または人の性質などの所有を表す。「おはす・おはします」の場合は、親族関係の所有も、物事や性質などの所有もともに見られるが、用例数にはそれほど差がない。一方、「わたらせたまふ」の場合は、人の所有を表す用例は3例しかなく、人の性質や事柄などの所有を表す例に偏る。例えば(29)では、「わたらせ給ふ」で「やすい御心」の(非)所有を表す。

(28) 「(略)かかることどもものし給はましかば、誰が御為もいかに思ふさまにて生ひ立ち給はまし。(略)」など、(苔の衣 : 253)

(29) 保元以降は、乱逆打ちつづいて、君やすい御心もわたらせ給はざりしに、入道はただ大方を取りおこなふばかりでこそ候へ。(平家物語/巻三 : 241)

また、「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の3語には、「所在文」に相当する用例にも違いが見られる。(30)は、「神達」の所在を表す用例である。このような、「神、観音」などの存在は、ほぼ「おはす・おはします」で表されている。「わたらせたまふ」には1例だけ「菩薩」の存在を表すものがあるが((31))、「おはす・おはします」が表す「所在文」とやや異なり、普賢菩薩と虚空蔵菩薩の像が持仏堂に存在することを表している。中世期の「ものしたまふ」にはこのような神仏の存在を表す用例が見当たらない⁽⁵⁾。

(30) 八百万代の神達、この月に出雲の大社に参り集まり玉ふ。己が国々におはしますべからずとて、諸の神達、我が国々にはおはしまさず。故に十月を神無月とは申すなり。(太平記/巻二十五 : 231)

(31) 幼少の時より崇め奉りける普賢、虚空蔵の渡らせ給ひける持仏堂に入れ奉りて、様々に勞り奉り給へり。(義経記/巻六 : 312)

6. 3. 三語の違い

ここで6.1、6.2で見た三語の違いが何に起因するのか、考えてみたい。

まず、「おはす・おはします」は、そもそも、「いる・ある」の尊敬語である。だからこそどのような種類の存在文も用例が見られると考えるとよい。次に「わたらせたまふ」は、本来、移動動詞である。存在を表す場合も、移動の結果という含意があり、ゆえに空間的存在文の比重が大きいのだと考えられる。では、「ものしたまふ」の場合、その個性は、どこにあるだろうか。

ここで思い起こしたいのは、「ものす」が結果を伴う人間の動作を代用する動詞であるとい

う点である(余 2021)。余(2021)では、「ものす」は自動詞用法である場合、「存在・移動・その他(結婚する、懐妊するなど)の動作を中心に用いられることを明らかにした。他動詞用法である場合、「言う・書く・作る・盗む」などの意を代用する。また、「ものす」の表す動作には、「達成する」「結果物がある」という特性が伴い、このことが中古から近現代まで一貫していることを述べた(余 2021: 40)。移動の意を代用する場合には目的地に到着する、または到着したことを表す⁽⁶⁾。「言う」「書く」のような動詞の代用では発話・伝達内容が相手に届くことを表す。他の動作の用例は少ないが、例えば近世期の用例(32)の「ものす」は「盗む」の意で用いられている。「盗む」動作の結果として実際に「金銀」を手に入れた用例である。

- (32) 「(略)今宵家内に潜入りて、咱はある涯りの金銀をものせん。(略)」(略)惧に納戸に潜入りて、朱之介は那這と、撈りて財囊を引出し、(近世説美少年録(3): 102)

この「結果(物)が伴う」という性質は、「ものす」が代用する動作に一貫して備わっていることになる。このように、「言う」であれば「発話情報」というものが伴い、「書く」であれば「手紙」というものが伴う。また「移動」であれば目的地に「到着する」結果が伴い、「盗む」であれば「金銀」というものを手に入れた結果物が伴う。存在を表す「ものす」の場合にもこの「結果(物)が伴う」という性質が現れ、「所有文」のなかに、親族の存在を表すものが特に多く、動作主はある人を所有し、「親族」という関係性の伴うことを表すと考えられる。

これを踏まえてさらに、「空間的存在文」における「実在文」と「眼前描写文」の用例が見当たらないことについて考えてみたい。「実在文」は、金水(2006)が述べるように、「神様/宇宙人/幽霊」などの存在を表すものである。「ものしたまふ」に「実在文」の用例が見られないのは、「神」や「幽霊」などの行為を表す動詞ではなく、人間の、結果を伴うリアルな動作を代用する動詞であるためだろう。また、「眼前描写文」は、眼前の存在を描写するため、発話者と存在する対象が同一の発話場面(同じ時間・同じ場所)に存在することが必要である。一方、「ものす」は代動詞であって、主体の「存在」に言及する場合もあえて臙化した表現となる。存在を表す「ものしたまふ」はこのような性格から発話場面の同一性を持ちにくいと考えられ、そのため、「眼前描写文」の用例がないと考える。さらにいえば、そもそも「眼前描写文」や「実在文」などの存在文タイプは全体から見ても非常に周辺的なものである。存在を表す「ものしたまふ」は代用表現として存在文の主要なタイプにのみ進出したという見方もできるだろう。

存在を表す「わたらせたまふ」の場合は、その用例が本来、移動動詞としての「わたる」の用法から派生した存在用法であるとされる。中村(2001)は早く『源氏物語』に、動作主が移動して結果的に存在するという用例があると指摘している(中村 2001: 27)。中村(2001)によると、(33)は「ちょうど源氏も来合わせていらっしゃった時なので、その贈物を女別当がお目にかける」という場面で、移動の結果、存続する存在が表されているという。

- (33) 殿も渡りたまへるほどにて、かくなむと女別当御覽ぜさす。

(源氏物語/総合：370)

このように、発話者が存在主体(「わたる」の動作主)の場所へ移動する(あるいは、存在主体が発話者の場所へ移動する)場合、動作主の存在、すなわち移動の結果の存続は、発話場面すなわち「眼前」において把握される。「わたらせたまふ」の「眼前描写文」の用例は、いずれもこのような条件で用いられていると考えられる(用例(26)など)。一方、「ものしたまふ」の場合、結果(物)を伴うという意味的性質に即して、到達先が明確な移動は表すことができ、その到達先が眼前でない場合は「所在文」として用いることができるが(用例(13)など)、到達先が「眼前」の用例はない。臙化の代動詞という性格が「ものしたまふ」の「所在文」の多さと「眼前描写文」に用いられないという制約に結びついていると考える。一方、「わたらせたまふ」にはそのような制約がないために「所在文」としても「眼前描写文」としても運用可能であったと考えられる。

次に、「ものしたまふ」における「限量的存在文」の様相について検討する。3節の表1で示したように、存在を表す「ものしたまふ」において、「限量的存在文」は全体の6割近くを占める。「初出導入文」と「リスト存在文」の用例はない。つまり「部分集合文」と「所有文」で用例の6割近くに及んでいる。

「限量的存在文」は、前文脈に既存する特定の対象(「所有文」)あるいは特定の集合(「部分集合文」)を前提とし、その存在を表す存在文である。3節でみたように、「ものしたまふ」は「所在文」「所有文」が多い。ある特定の貴人の存在を表すことから「所在文」が多く、ある特定の主体との関係において対象の存在を表すことから「所有文」に偏るといえるのではないか。

一方、「リスト存在文」は、存在対象を数え挙げていく表現である。「リスト存在文」のように、前文脈に既存する特定の対象ではなく、新たに発話場面に導入される対象の存在は「ものしたまふ」では表現しにくいのだと考える。また、「初出導入文」は金水(2006)が述べたように、物語の展開上、登場人物を導入するために特に動機づけられた特殊な表現である。そのため、3語のうち、「ある・いる」の尊敬語である「おはす・おはします」にのみ担いうる存在表現であると考えられる。

6. 4. ジャンルによる違い

存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」のもう一つの異なりは、ジャンルによる違いである。今回使用のテキストによる用例の有無多少を表4に示す。表4から分かるように、存在を表す「おはす・おはします」はジャンルを問わず幅広く使われている。一方、存在を表す「ものしたまふ」はほぼ「王朝物語」専用と言える様相である。筆者の調査では、軍記物語だけでなく、その他のジャンル(狂言、キリシタン資料など)にも一切用例が見られなかった(「ものしたまふ」だけではなく、「ものす」自体の用例が得られない)⁽⁷⁾。

表4 存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の用例分布

	王朝物語	御伽草子	日記・紀行	説話・随筆	軍記	計
ものしたまふ	148(98.7%)		1(0.7%)	1(0.7%)		150
おはす	498(66.8%)	8(1.1%)	1(0.1%)	66(8.8%)	173(23.2%)	746
おはします	492(69.5%)	29(4.1%)	21(3%)	74(10.5%)	92(13%)	708
わたらせたまふ	15(16.3%)	8(8.7%)	6(6.5%)		63(68.5%)	92

「ものす」は本来、平安時代の仮名文、特に貴族の生活を描写する雅文作品(『源氏物語』『蜻蛉日記』など)に多用されている。「中世王朝物語」は『源氏物語』という和文体の作品に大きく影響を受けているとされ、だからこそ「ものしたまふ」は中世王朝物語にも多用されていると考えられる。一方、軍記・説話という文学ジャンルは、いずれも中古の漢文体作品に影響を受けた、和漢混淆文である。例えば『日本古典対照分類語彙表』によれば、『平家物語』の漢語の割合は『源氏物語』より高くなっている⁽⁸⁾。その漢語は平安時代の仮名文学作品に用いられるもの、記録語文に用いられるもの、日本漢詩文に用いられるものが『平家物語』に受容されているという(佐藤(1966))。また、『太平記』の場合は、多くの漢籍や仏典などの影響を受け(増田(2001))、『平家物語』に比べれば、「直訳的な漢文調で、生硬な感じをさへ与へる」(佐藤(1966))という。『御伽草子』の場合は、擬古文的な作品であって「和」の性格を持つと考えられるが、存在を表す「ものしたまふ」の本動詞としての用例はない。ただし、補助動詞としての用例は確認できる((34))。「ものしたまふ」そのものは衰退傾向にあるが、和文体ゆえに補助動詞用法を保持しているものとする。

- (34) ほゝ笑みて、「さても / \ ありがたき御よしみにぞものし給へ。(略)」と手をつきて居る。
(福富長者物語:386)

「ものす」が軍記物語に見られない理由は、まず「ものす」の「和」「雅」の性質がこれらの作品に合わないためと考える。中世の「ものす」は擬古文としての性格が強い和文・雅文体での使用が特徴として認められ、その条件でのみ中世期に命脈を保っているといえる。

これに対し、存在を表す「わたらせたまふ」は、中村(2001)・高橋(2010)の指摘の通り、ほぼ「軍記物語」に集中しており、92例中63例が「軍記物語」の用例である。存在を表す「ものしたまふ」が「軍記物語」で使われていない様相は、確かに「交替」にも見えるが、むしろ中世期には「ものしたまふ」は衰退する一方、「わたらせたまふ」は本来の移動動詞「わたる」としての性質において、空間的移動から空間的存在を表す用法が生じた。その結果、「ものしたまふ」の用いられない和漢混淆文としての軍記物語で顕著に実現したと考えるのが合理的である⁽⁹⁾。

また、6.3節に述べたように、「わたらせたまふ」の用例は、本来、移動動詞としての「わたる」の用法から派生した存在用法である。「中世王朝物語」において存在の意を表す「わたら

せたまふ」が見られるのは、中古の用法を受け継いだ類と位置づけられよう。「ものす」は擬古的な和文・雅文体としての性格から和漢混淆文の軍記物語へは継承されなかった。一方「わたる」は和漢混淆文など、ジャンルの制約がない。そのため、存在を表す「わたらせたまふ」は軍記物語のなかで発達した。しかし、全体的に見ると、軍記物語の中で存在を表す表現で最も多いのは「おはす・おはします」である。軍記物語で存在を表す「わたらせたまふ」が偏在するように見えるのは、「ものしたまふ」に交替したというよりも、あくまで制約のないジャンルで運用された結果が顕著に捉えられた様相と考える。

7. おわりに

以上、本動詞用法に限定して考察した結果、存在を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の用例には違いがあることがわかった。その違いは、それぞれの語彙項目の個性を反映し、ジャンルの制約で対立的に用いられたものと考えられる。

まず存在を表す「おはす・おはします」は、「いる・ある」の尊敬語であり、作品ジャンルの制約もなく、「空間的存在文」と「限量的存在文」における全ての種類を網羅している。

次に「ものしたまふ」の場合は、「限量的存在文」の用例が60%近くあることが特徴的である。また、和文・雅文体での運用に限られるという制約を持ち、軍記物語というジャンルには用例が見られない。加えて、「空間的存在文」には「所在文」「生死文」、「限量的存在文」には「所有文」「部分集合文」という四つの下位分類のみに用例が見られる。これは、「ものす」自体に「結果(物)が伴い」「人間のリアルな動作を描写する」「特定の人や集合の存在を表す」などの特性があることから説明づけられる。

最後に「わたらせたまふ」の場合は、「空間的存在文」が用例の80%近くを占めることが特徴的である。これは、その存在用法が、本来の移動動詞「わたる」としての性質において、空間的移動の結果の存続から生じたものであり、空間的存在を表す用法に偏るためと考えられる。運用面では70%近くの用例が軍記物語に用いられている。ただし、軍記物語において敬意を伴う存在表現は「おはす・おはします」の用例が圧倒的に多い。存在の「わたらせたまふ」は御伽草子などの和文体の文献にも見られる。中世期には、存在の「ものしたまふ」は王朝物語を除いて廃れており、それとは独立に、運用上文体的制約のない「わたらせたまふ」が和漢混交文としての軍記物語の中で顕著に運用されたと考える。

この結果から、「ものしたまふ」の減少の要因について、「わたらせたまふ」との交替から説明する見方には再検討を要し、「ものす」の特性とその変化、存在以外の用法の消長、例えば補助動詞用法の衰退、すなわち「ものしたまふ」敬語形の衰退から考察する必要があると考える。

- (1) 中古における「存在」の意を表す「ものしたまふ」の場合は、「空間的存在文」68例(47.6%)、「限量的存在文」72例(50.3%)、うち58例は「所有文」である。
- (2) 「(略)まことに心苦しく、さやうなる人などもものせねば、迎へきこえて後見奉らまほしく覚え侍りしかど、(略)」などと、(苔の衣:51)は、「ものす」が単独で存在の意を表す用例であり、「所有文」に相当するものである。
- (3) 「実在文」「眼前描写文」「初出導入文」「リスト存在文」は、「おはす・おはします」においても数パーセントずつであり、存在を表す「ものしたまふ」においてその用例が確認できないのは、用例数の母数が少ないことによる可能性も考慮する必要はある。ただし、中世だけではなく、中古においても「存在」の意を表す「ものす」には同様に、この4類型の用例が見つからない。全140例のうち、「所在文」54例、「所有文」53例、「部分集合文」21例、「生死文」12例である。よって、用例の絶対数が少ないことに起因する傾向ではなく「ものす」の特徴と考える。
- (4) いずれの作品においても、「わたる」1600例近くのうち、「わたらせたまふ」が312例、存在92例に対して、補助動詞が57例、移動が163例である。「V-わたらせたまふ」の用例は、「存在」「移動」を表すもののほか、「見わたる」「思しわたる」「悩みわたる」などのような、動作の継続を表すものがほとんどである。
- (5) 中古でも同様に、この種の用例は見当たらないことが確認できる。
- (6) 中古における「移動」の意を表す「ものす」では、189例のうち、「到達」を表す用例は143例(75.7%)、中世の場合には、80例のうち、「到達」が57例(71.2%)見られる(余(2021)参照)。
- (7) 調査資料は、国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』に収録されている作品であり、底本は、大塚光信編(2006)『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』(清文堂出版)、『天草版平家物語』Nifon no cotoba to historia uo narai xiran to fossuru fito no tame ni xeua ni yauaraguetaru Feiqe no monogatari. (Shelfmark:Or. 59. aa. 1)(大英図書館蔵)、『天草版伊曾保物語』Esopo no fabulas:Latinuo uaxite Nippon no cuchito nasu mono nari. (Shelfmark:Or. 50. aa. 1)(大英図書館蔵)である。
- (8) 『平家物語』における漢語延べ語数が23831語であるのに対し、『源氏物語』における漢語延べ語数は10528語である。
- (9) なお、軍記物語においては、「おはす・おはします」にも移動を表す例が見られるが、180例と少ない。

参考文献

- 安部清哉編(2020). 『シリーズ〈日本語の語彙〉3 中世の語彙—武士と和漢混淆の時代—』朝倉書店.
- 金水敏(2006). 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.

- 呉寧真(2019). 「動詞連用形に後接する「ものす」」『国学院大学大学院紀要. 文学研究科』(50), 19-33.
- 佐藤喜代治(1966). 『日本文章史の研究』 明治書院.
- 高橋良久(2010). 「中世王朝物語」における存在詞「ものしたまふ」と存在詞「わたらせたまふ」 『日本語学最前線』 和泉書院. 325-344.
- 中村幸弘(1995). 『補助用言に関する研究』 右文書院.
- 中村幸弘(2001). 「存在詞「わたらせたまふ」と、その周辺」『國學院雑誌』 102-11, 23-37.
- 増田欣(2002). 『中世文藝比較文学論考』 汲古書院.
- 松本昂大(2020). 「中古和文における移動動詞の経路, 移動領域の標示」『日本語の研究』 16(3), 17-33.
- 宮島達夫 [ほか] 編(2014) 『日本古典対照分類語彙表』 笠間書院.
- 余飛洋(2021). 「モノスの自・他用法と他動詞用法の拡大について」『名古屋言語研究』 15, 29-42
- JapanKnowledge Lib (<http://japanknowledge.com/library/>)
- 国立国語研究所(2022) 『日本語歴史コーパス』 (バージョン 2022. 10、中納言バージョン 2. 7. 0)

使用テキスト

【中世】『新編日本古典文学全集』(小学館): 宇治拾遺物語、徒然草、十訓抄、保元物語、平治物語、平家物語、曾我物語、太平記、義経記／『中世王朝物語全集』(笠間書院): あきぎり・浅茅が露、海人の刈藻、いはでしのぶ、石清水物語、木幡の時雨・風につれなき、苔の衣、恋路ゆかしき大将・山路の露、小夜衣、しのびね・しら露、雫ににごる・住吉物語、とりかへばや、八重葎・別本八重葎、松浦宮物語、風に紅葉・むぐら、松陰中納言、夜寝覚物語、我が身にたどる姫君(上)、我が身にたどる姫君(下)／『日本古典文学大系』(岩波書店): 御伽草子

*本研究は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2125 の財政支援を受けたものです。この場を借りて「東海国立大学機構融合フロンティア次世代研究事業」に御礼申し上げます。